

平成 22 年度  
第 3 回 朝日地域審議会  
会議録（概要）

期日：平成 22 年 10 月 19 日（火）

場所：鶴岡市朝日庁舎 すまいる

平成 22 年度 第 3 回 朝日地域審議会 会議録

○日 時：平成 22 年 10 月 19 日（火） 午後 1 時 30 分から午後 4 時 30 分まで

○会 場：鶴岡市朝日庁舎 すまいる 大集会室

○出席者：敬称略

（委員）佐藤正、齋藤健一、松本壽太、宮崎重美、伊藤文一、佐藤照子、難波玉美、佐藤芳彌、  
清野義次、佐藤清、帯刀春男、井上時夫、難波庄一、菅原和則

（20 名中 14 名出席）

（市側【庁舎】）朝日庁舎支所長、各課課長・主幹、総務課・商工観光課・農林課職員

1. 開 会

2. あいさつ 会長、支所長

3. 協 議

－ 別紙 各分科会会議録による －

4. 全 体 会

（1）分科会の報告

各分科会協議事項について、総務課職員より概要を報告

分科会座長より報告

【コミュニティ分科会】（帯刀春男）

コミュニティ分科会のまとめの報告のなかで漏れていた点があり、また分科会のテーマとも違う部分で意見があったので少し話をしたい。ある個人が個人的におこなっている事業で、地元の資源、たとえば蛍だったり木の葉だったり、そういうものもいわゆる無い所にとってはとても資源があるというやり方で、実際個人のイベントとしてやっているという話があり、まだまだコミュニティでは繋がらない部分もあるが、産業としては大々的にはできないけれども個人的なものであれば、まだまだ素材がいっぱいあるのではないかと、という意見が出た。地域の川や山、木、草もまだまだ可能性があるのではないかと地域の良さについて改めて発言してくれた委員がいた。この場で紹介したい。

【農業農村分科会】（松本壽太）

この地域の農林業について、今始まったことでなく、長い間かけて没落の経緯があると思うし、現状の説明を受けても気が重くなる。しかし世の中が動いているということで、従来どおりの枠からはみ出すような見方を活用したりすると、全てが大変なことばかりではないというイメージが出てきた。

小さいことではあるが、そのようなことに力を注ぐことが新しい分野、新しい流れを作り出すことになるかと思う。農商工連携とか、行政との協力とか、いろんな事を活用してこれから向ける、また国の対応なども考えると辛い、苦しいだけではなく新しい、明るい方向に進んで欲しいと感じる。

（2）その他

次回日程について

第 4 回については、11 月 15 日～22 日を目途として調整することを確認する

5. 閉 会

平成 22 年度第 3 回朝日地域審議会  
中山間地域生活環境（機能）の維持再生について  
【コミュニティ分科会】 会議録

○会場：鶴岡市朝日庁舎 すまいる 視聴覚室

○出席者：

（委員）佐藤正、齋藤健一、佐藤芳彌、佐藤清、帯刀春男、難波庄一（12 名中 6 名出席）  
（事務局）総務課長、市民福祉課長、税務市民主幹、建設環境課長、教育課長、  
総務課課長補佐、総務課地域振興班係長

（1）開 会

（2）協 議

人材育成（役員の確保）及び防災体制・機能の整備について  
五十嵐係長が配布資料をもとに説明

質問（佐藤正）

鶴岡市南部中山間地域調査研究報告書の中で「デカップリング」という言葉が出てくるが、どういう意味か。

回答（五十嵐係長）

報告書の中では、農業政策の中での「直接所得補償」制度という意味で解している。

意見（佐藤芳彌）

いろいろ資料を出してもらったが、コミュニティ実態調査でかなり詳細な調査を行っていることが分かる。この調査を今後どう活かし進めていくのか。これまでもいろいろな調査を行ってはいたが、なかなかその後に結びついていないようである。

回答（五十嵐係長）

鶴岡市南部地区調査研究事業等、調査研究の結果等を参考としながら、朝日地域の振興方策について地域振興ビジョンを策定し、その実践を進めているところである。また、3 ヶ年総合計画を策定しているが、その総合計画にも調査研究の成果を反映させる形で課題に対する施策の具現化を図っている。

意見（佐藤芳彌）

少子高齢化時代で、今後の人口予測も含めながら、どの時点でどのような施策を行っていくかが重要だと思う。具体的には過疎化によるコミュニティ機能の維持や学校再編などの課題が出てくることが予想される。

意見（帯刀春男）

現段階で現実的に集落がなくなるような不安がある集落もあるのではないか。例えば、田麦俣集落など人口が多かった集落が、今は減少してしまい共同作業などが容易でないという話も聞く。また、消防費などの負担も増えていくようである。そのような集落もあれば、倉沢や中村のようにあまり世帯数が減少していない集落もある。

意見（佐藤正）

倉沢も以前は子供の数は非常に多かったが、現在小学生はだれもいないし中学生も一人だけである。そういう周期の時なのかと思うが。

意見（総務課長）

倉沢、中村に共通するのは三世代同居世帯が多いことであり、家の跡継ぎが同居し、鶴岡市街地へ通勤している状況で、このような原因があると思う。

意見（佐藤正）

今回準備の資料についてはよくまとめられており、現在の課題はほぼ出尽くしていると思う。重要なのは先ほど佐藤芳弥委員も言っていたが、将来的な面で不安があるが、住民は不安だからといってこの地域から出て行くこともできず、生活するのに必死で、考える余裕もないのだと思う。だが、資料でも分かるとおり世帯数はどんどん減少しており、近い将来、直接的に大きな影響が出てくる。そこまで集落に対応できる余裕もなく生活しているので、行政で何かてこ入れできる部分がないものか。調査するのはよいが、何年もかけて調査をしてどんな対応をするのか、具体的な対応は遅れている。一方、合併により施策も旧市にあわせてどんどん平準化している。どんどん悪いほうに進んでおり、すぐにでも対応してもらいたいことがあっても財政難を理由に進まない実態がある。かろうじて中山間直接支払制度があるので集落が維持できている印象を持っている。

意見（帯刀春男）

では、今回のテーマである「人材育成（役員の確保）」と「防災体制・機能の整備」についてそれぞれ分けて進めていきたい。最初に「人材育成（役員の確保）」を議題としたい。

意見（佐藤清）

集落の役員や各種会合、集まり、会議についても、関連があるものについてまとめたりして数を減らし、役員の負担軽減を図ればよいのでは。

意見（佐藤正）

近年、会議の数が非常に増えている。市全体の委員のような会議も増えている。

意見（佐藤芳彌）

会議の数が増えているのは、行政の縦割りによるものもあると思う。人材の育成について、過疎で大変な集落でも活性化している集落では、やる気のあるリーダーがいる。人材育成というとなかなか難しいが、一人でだけではなく仲間と一緒にないと活性化は難しい。また、これからの地域づくりを考えたときに、これまで以上に地域住民と行政が一体となった取り組みが必要だと思う。また、思いばかりでなく、経済も伴わないといけない。そこをどう結び付けていくかが大きな課題だと思う。

意見（帯刀春男）

聞いた話だが、最近大網小学校の同窓会が地域を挙げて開催され、地域から出て行った人たちも参加して交流し、小学生も同窓会の出し物の練習に取り組んだという実践例がある。ある意味、地域コミュニティの理想のように思える。

意見（教育課長）

大網地域独特のものだと思うが、大網学校同窓会という組織があつて、東京支部も昔からあり、東京支部との交流が昔から伝統的に続いてきた。今年も27、8人の人が都市部から参加したが、大網出身者はそのうち半分で、もう半分はその人の知り合いや友人などが参加した。学校生徒の演劇や公民館の芸能発表を観て、夜は地元の人たちと交流した。地元大網の人も自由参加なのに、老人から児童まで多くの住民が参加した。東京支部の会長も、大網小が将来なくなっても同窓会だけは続けていきたいと話をした。都市との交流をすることで地域にも良い刺激となり、閉鎖的な感覚が薄れると考えられる。

意見（帯刀春男）

地域が活性化するためには外部からの交流により刺激を受けることも重要だと思う。地域がそのよう

な外部の人たちを受け入れる機会を作れないか。たとえば森づくり事業などの共同作業も考えられる。その地域が受け入れられるかどうかは課題だが。

意見（教育課長）

交流は閉塞的で暗いイメージを払拭できる可能性を秘めていると思う。例えばタキタロウ村もそうだが、市街地や県外からも人が来て大鳥地域で交流しており、大網の同窓会と通じるものがある。集落内の同じ住民同士でしか交流がないと、同じ話しかできず発展性がない。これから必要なのは起業精神だと思うし、そのためには交流を通じた外部からの刺激が必要であり、それが明るい村づくりに通じると思う。

意見（齋藤健一）

また、農協でも特産品開発なども行っているようであるが、多少費用がかかってもやむを得ないので技術がある専門的な人を指導する職員として育成すべきで今後必要だと思う。

いろいろ考えれば特産品も気づいていないだけで木の葉や蜜など、資源はたくさんあると思うし、それを活かすべきである。

また、先ほど会議などをまとめたほうがよいという意見もあったが、内容が別なものはやはりまとめられないので、それはそれで仕方ないかと思っている。

ちなみに上名川は草刈等共同作業を行う際に、どうしても都合が悪く参加できない人については代わりにシルバーを頼んで作業をしてもらっている。以前は作業に来れない人は現金を支払っていたが、作業には人手が必要なので、現在ではシルバーを頼んでもらって共同作業に参加してもらうように集落内で決めている。

意見（佐藤清）

今話しが出たような共同作業については、将来的に今の若い世代、20代、30代の人達が担っていかねばならないわけだが、今30代の若い人達の生の意見を聞く場、機会などが設けられているのか。

回答（五十嵐係長）

第1回目地域審議会の場合でも報告しているが、鶴岡まちづくり塾を開催している。この組織は旧市町村をグループ単位として約10名程度の若い世代の人たちが集まり、地域活性化のための問題、課題の洗い出し、具体的な提案も行うべく話し合いを行っている。以前報告した「六十里越街道マラソン」がまちづくり塾メンバーの中から出た提案である。

質問（佐藤芳彌）

若者が集まって話したり活動したりする場が昔は青年団などがあったが、今はスポーツ活動も停滞し、そのような機会も少なくなっている。

意見（総務課長）

若い人達が今地域の中で集まれるのが唯一消防団活動であると感じている。集落での消防費等、経費負担の面で地域も苦しいところもあるが、地域の若い人たちが唯一集う、しかも上下関係もあって非常にいい関係であるので、ぜひ守っていくべきだと思う。ただ、消防団も昔は定員いっぱい入れない時代もあったが、今では若い人の仕事の関係で問題もあり、入れない人もいる。

意見（帯刀春男）

最近では、若い人達が共同作業であるかに問わず雪下ろしなどをするとき、その親が危ないので作業をさせないという人もいるようである。そのような共同作業をする機会を与えていないのは問題だと思う。また、昔から行っている農道や林道などの草刈も、若い人からするとなぜこの道の草刈をしなければならないのかという必要性がわからず聞かれたこともある。確かに、昔からずっと行っている

から共同作業として続けている訳だが、あまり理解されない。それら作業の必要性を伝える機会も重要ではないか。

意見（齋藤健一）

共同作業を行っても今まで事故もなくやってきたのに、事故が起きたらどうするのだと言われたこともある。

意見（帯刀春男）

やはりこれからは共同作業を行う際に事故に対する補償というか、事前に保険が必要であろう。

意見（佐藤正）

鱒淵は既に自治会保険でそのような保険に加入している。

～「防災体制・機能の整備」について～

意見（帯刀春男）

本来地域の防災体制というものは、自分たちの地域は自分たちで守るのが基本だと思うが、最近災害も少ないため、訓練をするにもやる気が入らないように見える。自主防災の訓練も毎年消防分署から指導してもらいながら実施しているが、毎年同じような内容になっておりマンネリ化しているようである。

意見（齋藤健一）

上名川では役員が自主防災研修会に参加したり、自主防災マップを作成したりと活発に活動している。自主防災マップを作成する際、個人情報の関係も集落の総会で了承を得て情報を掲載している。

意見（総務課長）

自主防災組織への交付金を出しているのは朝日地域だけで、行政運営交付金の一環という位置づけである。将来どうなるか分からないが、来年あたりから他地域に合わせて自主防の交付金を行政運営交付金に含めて廃止し、先ほど言われたような必要な資器材購入時の補助を別に行う方法を検討している。

もうひとつ大きな課題が、消火栓ボックスとホースの件である。これも行政で設置していたのは朝日地域だけであるため、全市的には予算措置できない状況であり、各自治会の自主防災組織にお願いすることになるかと思う。しかし現段階で状況調査をしたところ、相当多くが老朽化しており修繕の必要性があるので、何とか今回かぎりではあるが行政で整備できないものかと検討しており、今年度予算要求を行う予定である。ただ、市としての設置義務はないため、全市的には地域で必要なものなら地域で設置すればよいというスタンスが基本である。

意見（佐藤芳彌）

確かに最近災害もほとんどないため、防災意識が薄いと思う。しかし、自主防災組織への交付金をもらうことで何か訓練をする必要性が生まれ、それが防災意識を少しでも持つことにつながるのでは。行政運営交付金に自主防災の交付金が上乘せされるというが、それでも防災への交付金という形がなくなると防災意識の低下の恐れがあるのではないか。

意見（帯刀春男）

朝日地域は遠距離であるため、火災発生から消防車が到着するまで時間が掛かることが考えられ、初期消火が非常に重要となる。初期消火に必要ということで消火栓ボックスやホースを整備してきた経過もある。合併しても変わるものではない。消火栓ボックスと消火栓ホースの整備は是非お願いしたい。

質問（佐藤芳彌）

防火水槽などの整備で水力交付金を使ったりして整備していたかと思うが、状況はどうか。

回答（五十嵐係長）

以前の水力発電交付金は電源立地地域対策交付金と名称が変わっているが、消防庁、農水省の補助金

も合わせて活用しながら、格納庫や積載車の整備を行っている。

回答（総務課長）

防火水槽の未整備が現在 41 基、耐震有蓋のものに整備済みが 61 基という状況である。

意見（帯刀春男）

防災意識の向上のための方法が難しいわけだが、以前駐在員の会議のときに防災の研修を行ったりしていた。駐在員、自治会長の立場としてはありがたかった。

回答（難波課長補佐）

今年はまだ行っていないが、朝日地域自主防災組織の課題研究ということで 8 地域の地区公民館単位で自主防災の研修も含めて年内に行う予定である。

意見（帯刀春男）

消防団員が少なくなっているのも課題である。若い人を勧誘しても断れたりすると聞くし、仕事が多様化し昼夜や土日に関係なく仕事をしている事もあり、消防団活動への参加が難しい実態があるようだ。

質問（佐藤清）

最近をよくテレビでゲリラ豪雨による土砂崩れなどの災害が報道されているが、朝日地域ではそのような危険箇所の把握は行っているのか。

回答（難波課長補佐）

山形県で土砂災害防止法に伴う調査を行っており、朝日地域では平成 20 年度から急傾斜地を中心に危険箇所の調査を行っている。昨年度に調査を行った箇所のある集落を対象に、調査結果の報告のため説明会を行う予定である。

意見（難波庄一）

大平にも鱒淵にも深い谷があり、砂防対策が必要となる。そのような対策をしないと中山間地域から市街地へどんどん住民が移っていってしまう。まだ砂防対策が必要な箇所があるので、是非実施してもらいたい。

意見（帯刀春男）

最後にまとめとして、①リーダーをどうやって養成していくか、②共同作業等で今までこうだったからというだけでなく、今後どうしていくか、③交流事業によりコミュニティの活性化だけでなく産業経済、販売にも結び付けていけないか、④これからさらに転出により人口が減っていく可能性もあるが、地域に住んでいる人達がどのようによりよく暮らしていくか、これらが課題となると思う。

（次回の分科会について）

分科会の委員としてのアイデア、意見を次回分科会の時にご提言いただきたい。（総務課長）

（3）閉会（帯刀春男）

平成 22 年度第 3 回朝日地域審議会  
農林業の六次産業化の推進について  
【農業農村分科会】 会議録

○会場：すまいる 第 1 研修室

○出席者：

(委員) 松本壽太、佐藤照子、清野義次、井上時夫、菅原和則、伊藤文一、難波玉美、宮崎重美  
(8 名中 8 名出席)

(事務局) 農林課長、商工観光課長、農業振興主査、商工観光主査

(1) あいさつ

松本壽太分科会座長

(2) 報告

農林課長、農業振興主査が資料をもとに説明

(1) 朝日地域の現状について

(2) 過疎計画における加工関連事業

(3) 販売関連事業

(3) 意見交換

意見 (宮崎重美)

新規就農者が朝日地域はゼロであった。鶴岡では大農家の子供の新規が多いようである。集落営農で新規が良いと思うが、行政の担い手事業は終了して区切りの時期だ。市街地から若い人を使ってくれと来るが、期間限定で雇用している程度である。地域でどのように若い人を育てていくか。行政と地域(集落営農等)が協力してやっていきたい。

意見 (佐久間)

行政の支援として、担い手を確保しながら集落営農等で育てていかなければならないと考えている。

意見 (宮崎重美)

市街地の人のほうが、農業に関心があって頑張っている。また、興味があるので物覚えも早い。ただ、朝日地域の農業は期間が限定されるので、冬期間はスキー場で働いている。それでも春になれば、働きに来てくれる実態であり、そういった人を育てていかないといけない。今年度から制度が変わっていく中で、農業の六次産業化を目指していきたい。

意見 (清野義次)

そばを作付けしているが、刈り取り機械が 2 台しかなく、中村集落では雪の中で刈り取りするほど刈り取り時期が遅れてしまう。そばの作付面積は全体で増えていると思うのだが、もっと多く刈り取り機械を導入することができないか。

意見 (井上時夫)

刈り取りは平野部から行っているようだ。山間地の方が、収穫時期が早いような気がするが。

意見 (清野義次)

加えて機械レンタル料や種代など経費がかさみ、お金を出すばかりで作った甲斐がない。

意見 (伊藤文一)

蕎麦屋等の専門店に出荷するなど、そばを生産する目的がないと苦しいのではないかと。ただ減反目標

を達成するためだけのそば作付けでは意味が無いと思う。

意見（清野義次）

刈り取り順番等、工夫をして欲しい。また、作っている人にもっと情報を教えて欲しい。

意見（伊藤文一）

そばの作付け時期をずらすなどの対策はしているようだ。

意見（宮崎重美）

現状で刈り取り機械のオペレーターが不足しており、2台がフル稼働しているとはいええない状態である。また、刈り取り機械が増えても維持費が増えるため、ますますそばを作る人の負担になってしまう。

意見（松本壽太）

農業の様々な政策は後手に回っている感があるが、守る農業から攻める農業に根本的に変えることはできないか。現実には確かに厳しいのはわかるが。

意見（伊藤文一）

後継者が農業で生活できるようになれば、ほとんどの問題が解決すると考えている。また、農業経験が無い人や若い人が入れば、突拍子も無いアイデアが出てくるのではないかな。

林業に関して、以前は外国産の木材（外材）が大量に輸入されていたが、最近では外国から外国に輸出されるようになってきており、輸入量が減ってきている。この辺りにある杉にも目を向けることができ、朝日地域の林業にとっていい時代が来るかもしれない。

意見（松本壽太）

『つや姫』を中国で売ることができないか。10%の富裕層がいるというが、数にすると1億人いる。他の果物はそのような動きがあるようだ。

意見（宮崎重美）

みどり農協では既に中国向けの米を作っているし、たがわ農協でもその動きがある。ただ、まだ低価格であり、軌道には乗っていないようだ。

意見（清野義次）

息子から田植えなどを手伝ってもらっているが、「田だけでは農業として成り立たない」「趣味にしてはお金がかかる」と言われている。中村には集団営農があるのでやっつけられるが、無いところはつらいだろうと思う。

意見（宮崎重美）

農協では、新規就農者には、農業に興味を持ってもらうために大豆・赤カブなどを栽培してもらっている。

意見（佐藤照子）

集団営農などに若い人が興味を持って参加している。農業が好きな人を大事に育てて欲しい。

意見（伊藤文一）

現代の農業収入が減り続ける状況が続くのであれば、支出を抑えるような生活をせざるを得ない。例えば、薪ストーブを使った生活に戻るなどは考えられないか。特に最近の薪ストーブは燃焼効率がよくなっている。

意見（佐藤照子）

薪ストーブの明かりがとても良く、温かみがある。ただ、家のつくりを昔のように元に戻すのは難しい。ペレットストーブならば設置できるだろうか。

意見（井上時夫）

残念ながら現代の家屋構造では薪ストーブ1つでは暖房が効かないと思う。各部屋に暖房が必要になっている。

意見（伊藤文一）

反対に薪ストーブがあると家族みんなが集まってくるという考えもある。

意見（菅原和則）

新規に事業を起こすとすれば、朝日に合わせた対策として、林業など山林に関連した事業を混ぜることはできないか。テレビで山を外国資本が買っていると報道があった。今後、金になると目論んでいるためだろう。そうなる前に、山を守りながら、山菜や観光などを、自分たちだけでなく大学生等を入れて事業をしていくのがいいのではないか。

加工施設を作るということだが、一般の食品加工会社が苦しい経営をする中、本当に採算が合うのか。それでもやるというなら、品物の種類や量、販売戦略を普通の民間会社同じように細かく考えてやっていかなければいけない。

意見（松本壽太）

地元で取れたものを地元で生かすという地産地消の点では、アルケッチャーノが一人勝ちのような印象がある。他に何かできないものか。

意見（宮崎重美）

温海の赤カブは、特に一霞が有名であるが、高齢者が頑張って守っている、まさに「一霞ブランド」であり、他の赤カブとも価格が違う。

意見（佐藤照子）

産直カーで販売に行くと、温海の産直カーとたまに並び販売することがあるが、商品として同じカブでもカブは「温海のカブ」、なめこであれば「朝日のなめこ」といったイメージが市街地のお客にできている印象がある。

質問（佐久間主査）

加工所について、行政が一方的に作るのではなく、地元の要望としてやっていきたいと考えている。もう少し意見を聞きたいが、潜在的な需要はどのくらいあるものなのか。

意見（佐藤照子）

缶詰加工はしたい人が多い。種類としては孟宗竹、月山竹、なめこなど。ただ、朝日にあった民間加工会社では、機械をリースしていたようだ。やはり冬場の品物は不足しそうである。

意見（佐久間主査）

山菜の出荷量データに出ている量は少ないようだ。こごみは61kgとなっているが、天然だけ集計したもので、おそらく促成栽培は入っていないと思う。

意見（佐藤照子）

出荷するまでの手間がかかるのもあると思う。JA女性部として藤島にあるJAの加工所に持って行くことができる。朝日にあった加工会社では収穫してそのまま出すことができたが、藤島に持って行くには皮をむいたり、加工した状態を出すことになっている。

質問（支所長）

山菜を加工しようと思うのは、自家消費用としてが主なのか。

意見（井上時夫）

知人に頼まれれば作るというイメージがある。基本的に山菜を収穫するのは、どこかに出荷しようというよりは知人への贈答用としての意識が強いと思う。

意見（清野義次）

わらびは塩蔵することが多い。秋の収穫後、塩蔵して春になってから天日干し、塩抜きして袋詰めを作るとぜんまいと変わらないくらいにおいしく食べることができる。

意見（佐藤照子）

缶詰だけでは施設として1年中は持たないと思う。缶詰施設を作っても冬の稼働率はかなり低くなる。民間加工会社は、いろいろなところから集めていた。

意見（清野義次）

民間加工会社は、わらびの塩蔵を戻して缶詰にするなど加工処理も自前でしていたから冬も仕事があったのではないか。

意見（佐藤照子）

山菜・きのこ販売は年間を通しては商品が不足している状況だ。

意見（伊藤文一）

以前はゼンマイを乾燥機にかけたものは農協で買わなかった。そのため個人宅で乾燥機にかけたものは、個人客に販売するようになり、出荷数量には出てこない。今は生産者それぞれに個人の顧客がついている状態だと思う。

意見（宮崎重美）

確かに以前は手もみが主流で、機械乾燥は敬遠されていたが、今年は農協でも乾燥機を導入している。

意見（伊藤文一）

今では購入する方も機械乾燥の方が手もみよりいいと言っている。以前悪かったと言われていたのは茹で方だったようであり、昔より大きな釜に変えて、茹で方についても細かい温度管理を行っている。

意見（支所長）

観光と農業の関わりはどうか。三栗屋などの栗園なども良さそうだが、大平にはわらび園もあるし、朝日地域であれば、きのこ園も可能なのではないか。

意見（阿部主査）

観光と農業を結びつける場合、なにより旅行者の立場に立った工夫が必要だと考える。もっと農協が中心となって日持ちがするような特産品開発を期待したい。例えば、わらびを収穫体験した場合、バスに生のまま積んで持ち帰るとなると帰宅までの品質保持等、検討する課題がある。農協を中心として、さらなる販売戦略を生産者と練っていく中で行政も協力していく体制が取ればと考えている。

意見（井上時夫）

山ぶどうしぼりはどうか。グリーンツーリズムで行っている人がいる。

意見（宮崎重美）

農協の営農部門はまだ弱い。山ぶどうはやっとたがわ農協の事業になった。加工品はぶどう酒や原液が多い。原液は全農でも力を入れるようになっていたので、さらに力を入れてやっていきたい。生産調整によって在庫はなくなってきた。

意見（佐久間主査）

山菜等、朝日を代表する品物をブランド化することで売れるようにしていきたい。

意見（支所長）

東京ふるさと会でPRするといいいのではないか。どこで買えるかのチラシを配るなどして、案内してもらえらるようにして、販路を見出すことが次につながる。

意見（佐藤照子）

例えば、櫛引の「あぐり」では、東京で月に一回直売を行っている。また、おいしい山形プラザに朝日の品物が多く行くようになった。

意見（井上時夫）

大網小同窓会では、粕漬や茄子漬が好評であった。

（3）閉会（松本壽太）